



バイ・
ザ・ウェイ

text by Haruko Ohta
illustration by Yasuko Yamada

春のお茶

作家
太田治子

春になると、一日も早くダージリンのファースト・フラッシュを飲みたくなる。日本の新茶に似た実にすっきりした味わいである。色も澄んでい。紅茶独特のブラウンよりも、グリーンに近くみえる。淡々とした春の色なのだ。清らかなダージリンの高地に春がきて、みどり色のはえがぶんぶんときびまわるころに摘まれたものだという。いつか、その地にいつてみたい。日本の紅茶専門店で購入ファースト・フラッシュは、かなり高い。私の買っている有機栽培のものは、五十グラムで千円近くする。ファースト・フラッシュの中では安い方とはいっても、毎日飲むものとしては、ゼイタクすぎる。それはよくわかっていたのだ。しかし、春の何よりの楽しみは、その年のファースト・フラッシュを飲むことにあった。銀座や新宿の紅茶専門店を梯子して、どこのお店のものがよいか少しづつ買って味くらべをするのがこたえられない。朝のテーブルで一人ゆったりとティーカップを手にしなげら、ああやっとなと思おう。ティーカップの中に、春の女神さまの笑顔が浮かんでくるのである。昨年来の仕事のもたつきやもやもや感がどこかへ消えて、これからしっかりしましょうと元気がわいてくる。

ファースト・フラッシュには、桜餅がよく似合う。小田急線成城学園駅前の成城風月堂の桜餅がおいしい。ほのかな塩味のする桜の葉にしっかりと包まれた桜餅を、葉ごとそのままいただく。白い餅の中のこしあんも、しつとりと上品な甘さである。遠い昔の花祭りの日のお寺の境内を思い出す。境内の満開の桜の木からは、花びらがちらちらと陽に輝いて舞っていた。もの心ついてまもないころの記憶である。「ママ、雪が降っている」

花びらに手を触れながら、幼い私はそう声を上げた。境内は、人でいっぱいだった。母としっかり手をつないで歩いた。恐らくは、一九五〇年代の四歳の春のことである。母と二人、神奈川県葉山の叔父の家で居候生活を始めてまだまもなかった。そのお寺は、鎌倉の極楽寺だったかもしれない。二十年前に偶然お寺の境内を歩いていて、何だかひどくなつかしい気がしたのである。

「今日は、お釈迦さまの誕生日。お釈迦さまに甘茶をお掛けしましょう」

母がいった。いつのまにか、人だかりの水盤の前までできていた。真ん中に、片手を上げたお釈迦さまらしい小さな仏像があった。生まれての赤ちゃんのようなお釈迦さまは、にっこり笑っておいでだった。水盤の甘茶を、お釈迦さまのからだに杓子で掛けるたびに、ふわりと甘いお茶の香りがあたりにたちこめた。その後にはふるまわれた甘茶は、夢のようにおいしかった。花びらが、甘茶の茶碗にも浮いていた。考えてみたら、私がお茶というものを意識したのは、あの花祭りの日の甘茶が初めてであった。今年の春は、久しぶりに花祭りの日にお寺へでかけて、ゆっくりと甘茶をいただきます。なつた。

おた はるこ／神奈川県小田原市生まれ。明治学院大学文学部英文科卒業。1986年『心映えの記』により第1回坪田譲治文学賞受賞。主な著書に『絵の中の人生』（新潮選書）、『恋する手』（講談社）、『明るい方へ』（朝日新聞出版）、『石の花』『時こそ今は』（筑摩書房）。最新作は、『夢さめれば』（朝日新聞出版）。